

遠巷説百物語

京極夏彦

Natsuhiko Kyogoku

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

遠巷説百物語◆目録

齒黒^{はぐろ}べつたり◆七

儀撫^{いそなで}◆九九

波山^{はさん}◆二八九

鬼熊^{おにくま}◆二八二

恙虫^{つつがむし}◆三七三

出世螺^{ししゅうせ}◆四六三

本文デザイン
しいばみつお

遠巷說百物語





はぐろべったり



◎齒黒べったり

あるひとふる　やしろ　まへ　とふ
 或人古き社の前を通りしに
 うつらかなる女のおんな　ふしおが　み
 女のおんなの伏拜み居たれば戯れ云て
 すぎ
 過んとせしに
 かのおんな　ふり
 彼女の振むきたる顔を見れば
 め　はな　くちばか　おほ
 目鼻なく口斗り大きくて
 げら／＼と笑ひしかほ
 ふため
 二目と見るべきやうもなし

昔、あつたずもな。

ある処どこに、長者どん殿みが居いたつたずもな。

その息子ひとあ独ひとり身みで、嫁よめつこ探みしてらつたずもな。

その時分とき、釜石かまいしさ行いぐのに越こえる笛吹峠ふえふきとうげつう峠たての下辺あだりに貧乏びんぼな百姓家ひやくしやうけが一軒いっけんあつて、それは美うつくすう双ふた子の姉妹きょうだいまりあ暮きらしておつたずもな。

姉あねつこのほうは恪氣りんき深ふかえわがままな娘あまで、妹いもうとのほうは正直者しやうじきのよく稼かせぐ娘めであつたと。

二人ふたりとも、年頃としごろさなつて、益々いっさ美うつくすな娘あまつこになつたずもな。

長者ちやうじやうの息子こあ釜石かまいしさ用足ようそくすに出掛いけた時とき、この妹いもうとのほうあ見初みそめてすまつたずもな。息子こあもう、寝ねても醒さめても娘めつこが忘れわすれられねなくなつたずもな。

なんとかすでえと思おもつて、息子こああの手てこの手てで云いい寄よつてみだと。

そのうち、妹娘いもうともその氣きになつて、その秋あきに祝言しゆげん拵しなげることが決きまつたずもな。

ところが、田圃たんぼの稲穂いねほが垂めれる前まえに、娘めつこあ居いねなくなつてしまつたんだと。

前前まへまへがら娘めつこに惚ほれておつた、松崎まつざきの天狗森てんぐもりに住すまう天狗殿てんぐどんに攫さらわれてしまつたずもな。

息子あ嘆き悲しんだど。

息子あ泣いでばかりいだずども、長者殿が見兼ねで、

「なら嫁は姉っこでも良かべ。同じ顔だべ」

と言ったずもな。

息子あ聞いた時は魂消たずも、慥かに同じ顔だもの構わねがど思い直して、姉っこさ嫁に娶ったど。

さで嬢にしでみつと、息子、また天狗さあに獲られるんでねえがと心配になつて、家の奥に頑丈で立派な座敷拵えで、そこさ嫁っこ入れで外さ出さねえようにして、上膳据膳で大切に大切にしたど。

だども、この嫁っこ、元がらわがままであつたてえば、まんつ家のこと何も為ねで、あれ欲し、これ欲し、あれ喰いでこれ喰いでと、贅沢の限りを尽したど。

お蔭で長者の家、わらわらど傾いてしまつて、そしてるうづに長者殿も病みついてらつたずもな。

そんでも嫁っこあ心根改めることしねで、わがまましてだんだど。

そんだらば、ある時、嫁っここの顔あべろつと、目も鼻もなぐなつてしまつたずもな。息子でえ、その顔見で、

「俺が嫁っここの顔、なぐなつてすまつた」

つて慌てで、家の中、隅隅まで捜したずも、目も鼻も何処にも落ちでなかつたど。

目つこも見えね臭い^{にお}も嗅げ^かねでえは嫁^{よめ}つこも困^こつて、氏神^{さんしち}様に三七二十一日願掛けで、性
根え直す、正直に稼^{かせ}ぐて誓^{ちか}つたらば、そのうち顔は戻^{かへ}つたずもが、曲^{まが}がつた性根は直^{ただ}つたもん
の、戻^{かへ}つた顔は醜^{みにく}くなつてつたど。
どんどはれ。

咄
はなし

天^{そら}がやけに蒼^{あお}い。

北^{ほつこく}国の空は無色陰鬱^{いんうつ}という心緒^{しんしよ}を抱^{かか}きがちであるが、そんなことはない。この辺りの夏空は藍玉^{あいだま}でもぶちまけたかのような色になる。その鮮烈^{せんれつ}さは清清^{すがすが}しきを通^すり越^こし、眼を細めずには居^ゐられない程に強い。他所^{よそ}から来た者などは暑い時期になると辟易^{へきえき}する程であるのだが、今年は蒼くなるのが一段と早い。

暦の上では未^まだ春である。

往來^{もうそう}は物凄^{ものすご}い活気である。人と馬が連^つなつて犂^{ひし}めき合っている。その熱気が気温まで上げてしまふものか、初夏を思わせる陽気である。

市^{いち}が立っている。

毎月、一の付く日には市が立つ。近郷近在から数え切れない人が出る。海のもの^{あらし}と山のもの、町のもの、遠くのもの^{とち}と土地のもの、有りと凡^{あらゆる}百品物がこの町に集まる。馬と人が群がり居並び、それはもう賑やかだ。

活気があるのは好ましいことである。

でも。

宇夫方^{うぶかた}祥五郎^{しょうごろう}は、人混みを好まない。

人混みというよりも市が余り好きではない。

煩瑣^{うるさ}いのは一向に構わぬが、臭気が我慢ならない。

生臭さや青臭さ、木の香り鉄の香り、埃や汗の匂^{ほり}いが代わる代わる、時に渾然^{こんぜん}一体^{いつたい}となつて

鼻を突く。

時に馬糞^{まぐそ}なども臭^{にお}う。

勿論^{もちろん}、平素より常に様様な匂いはしている訳で、無臭の場所などある訳はないのだが、海に

は海の、山には山の、里には里の匂いがあることだけは間違いない。

山で磯の香^{かお}が馨^{かお}るのは変だし、船上に花の香が漂うのも妙である。

市には何もかもがある。

だから何もかもが匂う。

祥五郎は江戸^{えど}で一年ばかり暮らしたことがある。江戸は水の匂いがした。江戸は人も多いし物も多い。こんな鄙^{いなか}など比べ物にならぬ程に多い。だが、それでも水の匂いが勝つ。水捌^{みずは}けも

悪^{わる}く、水路で区切られているからだろう。

遠野^{とのお}保^ほも、豊かな水系に恵まれている。

立派な川もあるし、池沼^{ちしょう}も数え切れぬ程にある。

川の流れは速く、水は清冽^{せいれつ}で、水量もまた多い。

そもそも、太古いにしえの頃この辺り一帯は湖だったと伝えられている。実際、この土地は険しく深い山に囲まれた窪地くぼちであるから、そうだったのだろう。それが如何いかにして干上がったものか祥五郎は知らぬし、また知りようもないのだが、少なくとも人が、人の手で水を抜いた訳ではあるまい。水は川となって流れ出たのだ。

それでも里や町まで水の匂いがすることはない。川は川、湖は湖だ。川に行けば川の匂いがするし、湖に行けば湖の匂いがするだけである。

江戸は、平地を堀で刻み水場を埋め立てて造った土地だ。遠野保とよのぼは、天然自然の地形のままだ。その差なのかもしれぬ。

この土地は、在あるがままに有るのだ。

だからこそ、ごちやごちやとした雑多な匂いが鼻に付くのだと祥五郎は考える。町が賑わうのは良いことだが、この雑踏のただ中に身を置くことだけは、祥五郎には些いささかきつい。

気付けば直すぐ横に馬の横腹がある。

馬はこの辺りの人人の生活くらしには欠かせないものだから、いつだって、何処にだっている。直接馬と関わらない身分の祥五郎でも、目にしない日はない。それでもこんな近くに身を寄せることはない。乗ることなども先まずない。

馬の匂いに辟易して離れようとしたら人にぶつかった。

人混みを避けるように裏道に抜け、空を見上げた。
蒼い。

こんな色になるのは少し早過ぎる。

年明けからこつち、随分と陽気が良い。昨年に続き今年も豊作だと百姓達は喜んでゐる。漁の方も調子が良い。獲った魚の置き場がいくらいだと聞く。悪いことではない。大いに喜ばしいことだろう。

しかし、錢がない。

ここ数年、市場に流れる錢が不足しているのだ。

それでも魚はどんどん遠野に入つて来る。品が余っているから値の方はずると下落して大変に廉い。一方、干物などを含む俵物には昨年から新しく役錢の課税が施行されている。こちらの値は上がった。いずれ仕方がないことではある。とはいふものの、町の者は皆、困惑しているようである。

遠野の民は魚ばかり喰つてゐる。

それでも、飢饉よりはずっと良いと祥五郎は思う。

喰うものがあるだけマシである。物の値段が下がるのも、悪いことではない。だが幾ら廉くなったとしても、錢そのものが不足しているのであるからこれは仕方がない。

金がないのは民草だけではない。藩政もまた、窮乏を極めてゐる。

天保の時代は凶作が続き、物の値は高騰し、一揆も起きた。

大きな声では言えないが、凡ては藩の施策が悪かったのだと祥五郎は考えてゐる。作物の出来不出来は藩の所為ではないが、困った時に備えることこそが政の要ではあるだろう。

ここ数年は豊作と平年作が続いているが、銭は相変わらずない。諸藩士から借り上げたり町方から御用金を供出させたりしても足りるものではない。

そもそも、銅不足は国全体の問題で、盛岡藩だけの問題ではないのだ。

この状況下で凶作となれば、幾ら魚が獲れても民の暮らしは成り立たなくなるだろう。だが、氣候ばかりは読み切れるものではないのだ。

祥五郎は漠然と不安になる。

裏道を抜け、幾分遠回りをして松崎まで出た。

船瀧不動尊堂の裏手に乙蔵が待っている筈だった。

乙蔵は土淵村の豪農の倅なのだが、野良仕事を嫌い、彼れ此れと考えを巡らしては新しい渡世を始め、その度に失敗ばかりしていると云う困った男だ。

ただ、世事には通じている。民譚から社寺の縁起、咒や謂い伝えまで虚実の境なく何でも知っているし、武家の秘め事商家の醜聞、近郷近在の噂話から役に立たぬ些事まで耳に入らぬものはないと豪語している。便利といえば便利な男だ。

齢は祥五郎より三つ四つ下だから、二十三だと思うけれども、十は老けて見える。乙蔵に言わせると苦勞知らずの祥五郎が童顔だということになるのだが、どう欲目に見ても乙蔵が齢相応の容貌とは思えない。

老け顔の町人は古い切り株に腰を下ろし、竹筒に入った何かを飲んでいた。当然、水ではないだろう。

「おや」

顔を向ける。

「遅え。帰るどこだった」

「済まぬ」

浮がねえ貌かおだなと乙蔵は言う。

「市が立つ日は大体そんな面だ。」

御譚調掛様おんはなししらべがかり

ア民の暮らし振りを憂えておるかい」

「混雑が苦手なだけだ」

その役名を口に出すなと祥五郎は言う。

「そんな役はないのだ」

事実上、祥五郎は無役である。盛岡藩にそんな名の役職はない。だから名目上は浪士と変わりがない。

遠野保は、鍋倉城なべくらの城下町である。

城下町といってもお城に藩主様が坐す訳ではない。

藩主の居城は盛岡城である。従つて慶長けいちやう

の後に一国一城令が敷かれて以降は、城ではなく館と称するが正しいのだろう。書面上は要害屋敷となつていと聞く。だが名目上はどうであれ城の形をしているのだから、城なのだ。

民百姓は皆、城と呼ぶ。

それもその筈で、この要害はその昔阿曾沼氏あそぬまが築いた、横田城よこたという歴とした城郭なのであ

る。阿曾沼氏は滅んだが、城は破却されずに南部家のものとなつたのだ。

遠野保は隣藩領との国境でもあり、交易の要所でもある。金坑もある。疎かには出来ぬ。

一時期は奉行などを城代として置いていたようだが、あまり巧くは治められず、治安は乱れたという。そこで盛岡藩は、寛永の頃に藩主の本家筋であり南部御三家筆頭でもある八戸南部家を独自の裁量権を与える形でこの要害に移封したのだ。八戸南部家はそれ以降遠野南部家となり、横田城は改築されて鍋倉城となったのである。

だから城なのだ。

今の城主は遠野南部家三十二世、南部義晋様である。

義晋様が跡目を継がれたのは七年前、当時まだ二十歳という若さであつた。若いとはいえず、あふれる威丈夫で、性格も豪放磊落、家臣一同も遠野の民も、この若殿に大いに信頼を寄せている。

ただ、遠野南部家当主は、世襲で盛岡藩筆頭家老職に就くことになっている。

筆頭家老は盛岡城常勤である。鍋倉城の城主は、城中にはいらつしやらないのである。

義晋様は筆頭家老として難題山積の藩政に携わりつつ、鍋倉要害の支配として遠野のことも気に懸けねばならないのであつた。

祥五郎は義晋様と同じ年である。

十の砌より三十二世を嗣がれるまでの十年間、側衆としてお仕えした。

家老職に就かれた際、祥五郎は義晋様直直に呼び出され命を受けたのであつた。

自分の目となり耳となつて遠野保の民草の動向を見極め、逐一報告せよ——と。

武家、商人、百姓、工人、獵師、漁師——遠野保には様様な人が住まう。

加えて奥州でも指折りの交易場であるから、諸国の者も集う。咄が生まれ噺が集まる。遠野保には、ハナシが溢れている。

そうした巷に流れるハナシを逐一聞き付け、真偽を見届け見定め、悉く報せよという令であつた。

御譚調掛というのも、適当な呼称である。

盛岡藩筆頭家老直属の御役ではあるのだが、そんな役儀は公式にはないのである。殿様直直の命を受けているとはいふものの、記録の上での祥五郎は藩士ですらなく、浪浪の身ということになっている。

知つたこっちゃねえと乙蔵は言つた。

「お前は殿様の手下のお侍様だべ。偉え。俺あただの破落戸だから」

お前はゴンボじゃないだろうと祥五郎は笑う。

「あのな、ゴンボというのはもつと乱暴なものだ。お前は幼童の頃より腕っ節は弱いし度胸もないぞ。喧嘩もせんではないか」

「まあなあ」

人と同じことをするのが嫌いなだけであろうと言つて祥五郎は笑つた。能く知つとるなあと乙蔵も笑つた。

「臍曲がりなのだわ」

「大いに曲がつておろう。そもそも、先だつて始めた煮売り屋というのは上手く行つておるのか」

尋いてくれるなと乙蔵は言う。

「駄目か」

「言いだぐね。言わずとも知つとる癖に。そうでなければ馬千匹千人の市の立つ日にお前と会つたりはしねべ」

咄ゝ買つてける酔狂者などお殿様のお俵え手下様ぐれえしか居ねべと乙蔵は苦笑いする。

「あのな、乙よ。儂のことを殿直直の命を受けた手下というならば、だ。その仕事を手伝うておるお前とても同じことではないか。殿はお前のこともご存じなのだし、お前に渡しておる手間賃も南部弥六郎様の懐から出ておるのだぞ」

遠野南部家の当主は、初代となる弥六郎の名を嗣ぐのが決まりである。

「儂も士分とはいえ浪浪の身。謂わば同役だ」

「いや、俺は駄賃付けの馬みでえなものよ。馬あ曳ぐのはお前だわ、祥五郎」

「で——」

その馬殿は何を運んで来てくれたのかなと言って、祥五郎は乙蔵の隣に腰を下ろした。

「座敷童衆を見だ」

「見ただと。お前がか」

この眼でなあと乙蔵は己が眼を指差した。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。